

Q 5 活動をステップアップしていくには？

A 1 長期ビジョンや計画を持つ

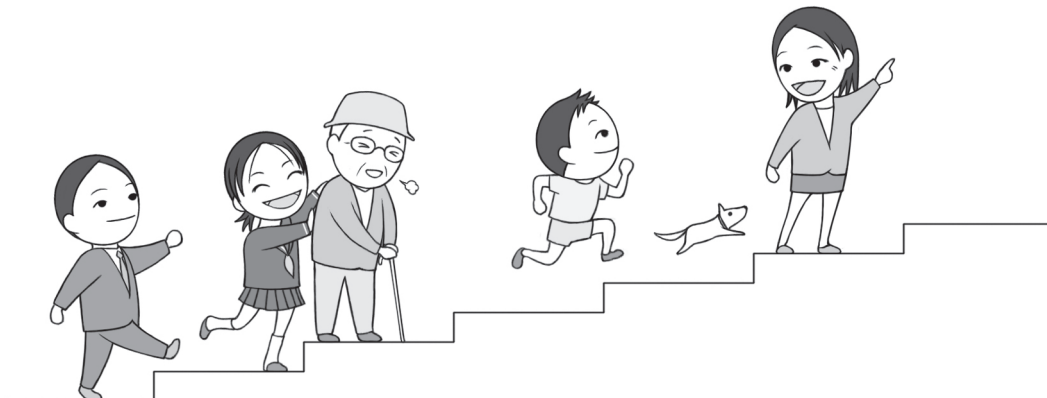
- a51 まちの将来像をシナリオとしてまとめる ...くらくらアートプロジェクト実行委員会
- a52 目標イメージの共有と次のステージづくり ...安心院町グリーンツーリズム研究会

A 2 活動を検証する

- a53 活動の区切りごとに懇談の場で振り返る ...くらくらアートプロジェクト実行委員会
- a54 地元大学生から客観的な評価を受ける ... (特)朝日町エコミュージアム協会

A 3 組織を再編成する

- a55 活動の段階に見合った組織づくり ... (特)NPO博多まちづくり
- a56 ネットワーク拡張型で“点から面の活動”へ ...エコネット津山



A1 長期ビジョンや計画を持つ

a51 まちの将来像をシナリオとしてまとめる

くらくらアートプロジェクト実行委員会（石川県金沢市）

地域づくり活動事例4 / P55

●みんなでまちを調査して将来像を考える

活動を開始した当初、メンバーによってまち観察を徹底的に行った。その成果を元に、地域の資源を地図上にプロットした調査地図を作成し、地区の将来像について意見交換する場を積極的に設けた。こうしてメンバーから出た意見と地域資源を合わせて、まちの目標として「大野町のシナリオ」を作成した。

●シナリオを活かす手段はさまざま

シナリオ作成は、地域プランナーのメンバーが中心となり、職能を活かして行った。シナリオといっても完成されたものではなく、「大野町をこうしていきたい」とみんなで共有する目標を示したものだ。これを具現化する手段として、アートや映像、芝居づくりと、さまざまな方法を取り上げながら活動を進め、あくまで楽しみながら目標に近づいていく達成感を演出している。

a52 目標イメージの共有と次のステージづくり

安心院町グリーンツーリズム研究会（大分県安心院町）

地域づくり活動事例54 / P110

●メンバーのための先進事例見学会を毎年実施

会では、グリーンツーリズムの先進地であるドイツをはじめ、ヨーロッパへ毎年見学に行き、活動の具体的な目標イメージをメンバー各人で共有している。その経験を活かして、グリーンツーリズムについての講演会、実践者との交流を地域で行い、知識・情報を確認すると共に、住民へのフィードバックにも心がけている。

●活動実績が次のステージに結びつく

また、次のステージとして、農業のみならず、文化、福祉、教育、景観などを一体的に考えて活動に取り組むため、この会が中心となって「大分県グリーンツーリズム研究会」を設立した。会のこれまでの実績が効を奏し、行政や県内の他団体を巻き込んで広範な活動を展開していくこととなった。

A 2 活動を検証する

a53 活動の区切りごとに懇談の場で振り返る

くらくらアートプロジェクト実行委員会（石川県金沢市）

地域づくり活動事例4 / P55

●ワークショップの後には交流を楽しむ時間を持つ

蔵の改修などいずれのワークショップでも、作業の後には、必ず軽食をつまみながら、他の参加者との交流を楽しむ時間を持っている。“ワインと軽食”のように、打ちとけて話し合える遊び心を大切にしながら場づくりを心掛け、参加者の声を聞くことで、「進む方向」や「やりたいこと」を参加者が共有し、自分たちの進む方向やスピードを確認している。

●時には「まちづくりフォーラム」などを開催して活動を振り返る

会では、1年間の活動を終了し、これまでの活動を振り返る「まちづくりフォーラム」を開催した。先進地からまちづくりリーダーを招いて、カメラを持ってまち探検を行い、ワークショップによるまちづくり活動の効果と今後の課題について討議した。このように、活動の区切りの段階で、外部の人を含めてそれまでの活動を振り返り検証することが、次の新たな展開に結びつく。

a54 地元大学生から客観的な評価を受ける

特定非営利活動法人 朝日町エコミュージアム協会（山形県朝日町）

地域づくり活動事例31 / P84

●活動をテーマに取りあげた大学生の論文を活かす

山形大学の学生が、この団体の活動を題材に学士論文を執筆した。学生は、1年間メンバーとして参加しながら、会の取り組みを記録し、地元住民の反応なども客観的な視点で書いている。学生には、メンバーと同じように、地元の資源調査をはじめ地元住民との懇親会など、さまざまな企画に参加してもらうことで、活動のより深い部分を見てもらうことができた。

A 3 組織を再編成する

a55 活動の段階に見合った組織づくり

特定非営利活動法人 NPO博多まちづくり（福岡県福岡市）

地域づくり活動事例25 / P78

●地区単位のまちづくり協議会から発展

定住者の流出や地域経済の低迷が続く中、昭和57年、「このままでは博多がのうなる」という古老のつぶやきをきっかけに、個人ボランティアをベースにした活動が始まった。最初に博多部4地区での「まちづくり協議会」設立、その連合体である「博多部まちづくり協議会」設立と、活動の輪を広げていった。衰退が続くという同じ課題を抱えながらも、博多部4地区はそれぞれ固有の歴史と文化を持っており、課題解決に向けてなかなか共に活動ができていなかったが、この組織が話し合いの場として機能し始めた。

●全セクターによる対等・協働のまちづくりを実践するための新たな組織づくり

行政や事業者などとの協働も図りながら活動を続けてきたが、ボランティアによる活動は限界となり、「博多部まちづくり協議会」の事務局部分をNPO法人化。平成12年、「NPO博多まちづくり」を設立した。地域住民だけでなく、これまで協力してもらった行政や事業者、学識経験者も役員などとして内部に取り込み、全セクターによる対等・協働のまちづくり活動を実践するための組織づくりを図った。活動を立ち上げ、当初からその中心となっていた人が事務局長となり、これまでの成果を活かし、課題を踏まえた活動を展開している。

a56 ネットワーク拡張型で“点から面の活動”へ

エコネット津山（岡山県津山市）

地域づくり活動事例23 / P76

●同じ市内で活動する団体が次々に連携

平成11年津山で「すまいづくり・まちづくりNPOネットワーク」の情報交換会が開催されたのをきっかけに、市内で活動する市民団体が集まり、「エコ」をキーワードにまちの再生を行うエコネット津山を立ち上げた。

さらに平成15年には、リユースプラザ津山「くるくる」を拠点に活動していたエコネット津山のメンバーと、津山市環境基本計画策定に携わった市民たちが連携して、活動の幅とネットワークをより広げるために、「エコネットワーク津山」と名前を変えて再スタートした。活動当初は津山市が設置したリユースプラザ「くるくる」の運営をはじめ、各種環境啓発活動、情報交換活動、「まちなか」でのエコをテーマとした再生の取り組みを行ってきたが、活動の範囲を市全体に広げていくために、より幅広いネットワークづくりを常に意識している。

活動を元気にするためのポイント

萩原なつ子（武蔵工業大学 助教授）

『地域づくりアイデア集』のもととなる「地域づくり活動支援調査」プログラムと私との関係は、少し変則的である。どこが変則的かという点で平成13年度は選考委員として、2度目は平成14年度の支援対象団体のメンバーとして、そして平成15年度には選考委員として再び関わることになったからである。短期間に支援対象を選考する側とされる側という異なった立場を経験できる機会はめったにあることではない。

選考委員として「地域づくり」を支援するプログラムに関わることの面白さは、限られた範囲ではあるけれど、日本各地の市民活動の傾向を把握できることにある。申請書に目を通すことによって、現在、地域がどのような課題を抱えているのか、そしてその課題を住民・市民がどのような方法で解決しようとしているのか、また、どのような面白い試みがなされているのか、あるいは行おうとしているのかを知ることができる。

申請書を読んでいると「ここに行ってみよう」「この人たちに会ってみよう」という案件にあたることもある。これは私が選考の際に大事にしているポイントのひとつである。そして支援対象団体を実際に訪ねる現地インタビューでは、申請書からだけではわからない地域の特性 - たとえば食文化や生活文化、自然環境、まちの表情など - や実際に活動している人々の目の輝きや意気込みを直に感ずることができるという楽しみがある。予想外に活動が展開していたり、おいしいものに出会ったりするとワクワクしてくる。

「地域づくりアイデア集」を手にとり、パラパラめくっていれば、きっと読み手に語りかけてくる活動にあたるはずだ。そのときは、ぜひ現地に行くことをお勧めしたい。その際、自分たちと同じような活動をしている団体を訪ねることはもちろん有意義だが、異なった課題に取り組んでいるところ、手法がおもしろいところ、地域性の異なるところを選んでほしいと思う。異文化交流ならぬ、異活動交流、異地域交流、異分野交流、異人間交流を、アイデア集を活用して積極的に行っていただきたい。

さて、本プログラムの支援対象となり、私もメンバーの一人として関わっている活動は、里山保全活動を目的に宮城県松島町で旗揚げした「日本三景松島芭蕉の里づくり交流会たけのこ炭の子クラブ」である（事例33）。活動の中心を担っているのは長い間、環境行政に携わってきている行政職員である。私は2年間、宮城県環境生活部次長としてNPO活動促進行政にも携わっていた。職員との会話を通して、実は何か市民活動をしたいという思いを持っている人が少なくないことがわかった。そこで機会あるごとに、どんな事に関心があるのか、何をやってみたいのかなど聞いているうちに絞られたのが「里山保全活動」だったのである。松島で伝統的な生活スタイルを保持しながら暮らしている家族と接点がある職員がいたことから、その関係を糸口に団体を設立したのである。支援対象となったことでメンバーの意気込みにも弾みがつき、今年設立3年目だが活動の拠点はもはや松島にとどまらない。歩みはカメのごとくではあるが、少しずつ里山保全という目標に向かって活動を積み重ねている。

ところで、たとえ助成対象にはならなくても、様々な助成プログラムに申請をし、自分たちの活動内容を担当者に知らせることはNPOの役割のひとつであると思う。なぜならばNPOの身上は、先駆性にあるからだ。つまり、申請時の応募要綱にはあてはまらないけれど、選考委員や担当者に新しい課題が発生していること、新しい動きが地域で始まっていることを知らせることは大事だからだ。そこから新しいプログラムが生まれるかもしれない。また、NPOにとって申請書を書くという作業は自分たちの活動が何を目指しているのか、何をしようとしているのかをメンバー同士で議論し、明確にする絶好の機会となる。そのような意味からいっても、「地域づくり活動支援調査」のようなプログラムの存在は大変重要なのである。